宮崎県立看護大学研究紀要18(1)：1～14，2018

研究報告

男子学生が抱く母性看護学実習に対する困難感の変化の様相と影響する要因

大野理恵，長鶴美佐子

【要旨】

本研究の目的は，男子学生が実習前から実習終了までに抱く母性看護学実習に対する困難感の変化の様相と影響する要因を明らかにすることである。

研究対象者は，母性看護学実習を3年次後期に3週間実施したA大学4年生の男子学生9名である。研究デザインは，半構成的面接法を用いた質的帰納的研究で，質問内容は実習前・中に抱いた困難感とその変化，影響した要因などの項目で構成した。

男子学生が抱いた実習に対する困難感の変化の様相は，「積極的姿勢へと変化」「困難感が継続」「実習前から消極的姿勢を示さない」の3つに分類された。「積極的姿勢へと変化」する様相には，急激に変化を示すものと，徐々に変化を示す2つのタイプがあった。急激に変化を示したタイプには，新生児の看護や分娩見学などによりもたらされた「感動体験」が影響していた。また徐々に変化したタイプには，「看護の方向性がみえること」と「対象から受け入れられているという安心感」が併存し影響を与えていた。また，積極的姿勢がみられたのは「看護者を目指す者としての意識を持った」時であった。

以上から，男子学生が抱く母性看護学実習への困難感への支援では，「看護の方向性がみえる」こと，「対象から受け入れられているという安心感」を持つこと，さらに「男性としての自分」に集中しがちな意識を，「看護者を目指す者」としての意識へと移行させることが重要と考えられた。

【キーワーズ】 男子学生，母性看護学実習，困難感，様相，影響要因

Ⅰ．序論

1. はじめに

我が国では1989年のカリキュラム改正で男子学生の母性看護学実習（以下「実習」）が義務付けられた。これを機に実習の展開方法の紹介や実習における課題等の問題点を導き出すための実態調査がなされ，男子学生が実習に対する不安や性差に関わる困難感を持っていることが報告されてきた[1) 2)]。男子学生の実習への苦手意識や困難感の研究では，男子学生が自己の性を過剰に意識し，患者やスタッフのほとんどが女性の病棟に身を置くことへの恥ずかしさや対象が異性であることへのとまどい，受け持ち対象者（以下「対象」）からの受け入れに関する不安，女性の身体をイメージすることへの困難さを抱いていることが明らかにされている[3) 4)]。

また，男子学生への実習指導に関する研究[5)～7)]も見られるが，「男子学生への精神的配慮」，「実習前の個別的な関わり」や「性差に配慮した教育的関わり」等の抽象度の高い示唆に止まり，より教育実践に役立つような具体的な指導方法を導き出すには至って

Rie Oono：フィオーレKOGA看護専門学校（元宮崎県立看護大学大学院博士前期課程）
Misako Nagatsuru：宮崎県立看護大学

ていない。教育実践に役立つ具体的な示唆を得るためには，男子学生が抱く苦手意識や困難感が，母性看護学講義（以下「講義」）や実習での教育的関わりおよび実習場での刺激により，どのように変化していくのか，その詳細を明らかにしていくことが必要であろう。

そこで，今回，男子学生が抱く母性看護学実習に対する困難感の内容を経時的に捉え，それらがどのような変化の様相をとるのか，そこにはどのような特徴や影響する要因があるのかを明らかにし，男子学生への実習指導における具体的な示唆を得るために研究に取り組んだ。

2. 研究目的

男子学生が実習前から実習終了までに抱く母性看護学実習に対する困難感の変化の様相と影響する要因を明らかにする。

3. 用語の操作的定義

困　難　感：男子学生が実習前から実習終了までに感じる「実習で円滑にいかない思い」や「苦手意識を持つこと」，「苦しみ悩むこと」などを含む消極的感情とする。

変化の様相：変化していく状態，どのように変化していくかの有様とする。

積極的姿勢：実習に対して前向きな言動や心の様子とする。

消極的姿勢：実習に対して前向きになれない言動や心の様子とする。

Ⅱ．対象と方法

1. 研究方法

研究デザインは半構成的面接法を用いた質的帰納的研究であり，質問内容は実習前から実習終了までに抱いた困難感とその変化，影響した要因などの項目で構成した。研究参加者は母性看護学実習を3年次後期に3週間実施したA大学の男子学生である。データ収集は母性看護学実習単位修得後の平成28年4月に行った。分析では，まず録音されたインタビュー内容を逐語録にし，講義・実習に対する思いが語られている文脈をデータとして抽出し，講義・実習に関わる困難感について，講義開始から終了までに抱いた困難感，講義終了後から実習直前に抱いた困難感，実習中に抱いた困難感の文脈をデータとして抽出した。次いで，内容の類似性に従い分類し，カテゴリー化した。さらに，実習中の困難感の変化に影響したと思われる文脈をデータとして抽出し，内容の類似性に従い分類し，カテゴリー化し，男子学生が抱く困難感と影響要因について明らかにした。次に，研究参加者個別に，困難感の変化の様相と影響した要因を，講義・実習に対する思いが語られている文脈をデータとして抽出したものに戻り，実習前から実習終了時までの経時的な困難感の変化の様相と影響する要因を整理した。その際に，研究参加者個人の困難感の変化の様相を，時間の流れを横軸に，言動や心の様子を縦軸にとり，上向きを積極的姿勢，下向きを消極的姿勢とした図を作成した。また，この図は変化がイメージできるよう，研究参加者の語りやその前後の文脈から積極的姿勢，消極的姿勢への変化を読み取り，またその変化の程度を表現した言葉を基に作成した。次いで，影響した要因も同様に加えて図式化し，その後に，困難感がいつどのように変化したのか，また，どのような要因がいつの段階で影響したのかという視点で，研究参加者の困難感の変化の様相と影響した要因の共通性と相異性を検討した。

2. 倫理的配慮

本研究の趣旨と研究への参加協力の自由の保障，対象者の匿名性およびプライバシーの保護，データは本研究の目的以外には使用しないこと，成績や学業遂行に不利益を生じないこと等を文書及び口頭で説明し，同意を得た。本研究は所属大学の研究倫理委員会（倫理審査番号第14号）の承認を得て実施した。

Ⅲ. 結果

1. 研究参加者の概要

A大学の4年生の男子学生15名に研究協力の依頼を行い，9名から研究協力の同意を得た（A～I氏）。研究参加者の平均年齢は22.7歳で，社会人経験者1名が含まれていた。

2. 母性看護学実習概要

研究参加者は，3年次前期に45時間の母性看護学講義を受けた後，後期の約5か月間，各看護学領域をローテーションしながら実習する臨地実習Ⅱの中で135時間の実習を行っている。基本的には学生一人で妊産褥婦の看護対象者を受け持って看護過程を展開するが，場合によっては男女ペアで受け持つこともある。

3. インタビューの時期と時間

インタビューの時期は　研究参加者の男子学生が実習の単位修得後の平成28年4月であり，一人一回行った。インタビューの平均時間は38分であった。

4. 母性看護学実習前・実習中に抱いた困難感

男子学生が実習前に抱いた困難感は17データから，13サブカテゴリー，6カテゴリーが生成された。以下に，困難感のカテゴリーを【　】，サブカテゴリーを＜　＞で示し，男子学生の語りであるデータを「斜体で表す。なお，表中の実習前とは，講義開始から終了までと講義終了後から実習直前のことを示している。

男子学生は，講義を受講し始めてからは，「*何か，妊婦さんの事例とか，いまいち身近に出産した人とかに接した経験がないていうのもあるんですか・いまいち，こう，現実的に想像できなくて，なんか苦手なんです。*」，「*妊婦さんとか褥婦さんへの看護ってどういうのがあるんだろうってのが，さっぱりイメージできなかった。*」と，＜妊産婦に接した経験がないからイメージが付かない＞ことや，＜女性の患者さんを受け持った経験がないからイメージが付かない＞，＜自分で体験できないからイメージできない＞ということを理由に【看護の対象としてイメージできないという不安からくる学習への困難感】を抱き，苦手意識や学習へ消極的な感情を抱いていた。

そして，講義終了後から実習直前までには，【将来の看護師としての自分に関係がない】，【実習での看護展開についての不安】　【男性であることを理由に拒否されるのではないかという不安】を抱いているということが明らかとなった（表1）。

また，実習中に抱いた困難感は16データから，9サブカテゴリー，4カテゴリーが生成された（表2）。男子学生は，実習中に，「*向こうはそんなに意識していなかったとは思うんですけど，ちょっと意識してしまって，ま，女性を触るっていうことに意識してしまったんですかね。*」，「*ずっと話し続けたりとか，そういうのが，むずかしいかなぁって思った。（中略）成人やら老人では男性の方を受け持って，車の話とかで，すごい話とかで盛り上がったりしたんですけど，あんまり女性にはそういうのってないのかなって思うんですけど。*」と，＜女性に触れることを意識してしまう＞，＜女性と話すことが苦手，話しづらい＞と感じるなど　【対象が女性であることに対するやりづらさ】を抱いていた。また，【性差を強く意識した対象の見方】，【男性であるがゆえの実習上の制約】など性差によりもたらされた実習への困難感を感じていた。さらに，それらによってもたらされた【対象への看護が導き出せないことによる実習の不全感】も困難感として感じていた。

5. 実習中の困難感の変化に影響した要因（表3）

男子学生が実習中に抱いた困難感の変化に影響した要因については，6名が語っており，21データから，16サブカテゴリー，6カテゴリーが生成された。

男子学生は，＜教員からの助言で必要な看護を考え始めた＞ことを経て　対象との関わりの中で＜対象のためになりたいという気持ち＞を抱いたり，「*（子宮は）出産直前だとこのくらい膨らんでるのが，今はどのくらい変化してるんだろうとか，何日目だか*

表1　母性看護学実習前に抱いた困難感

	カテゴリー	サブカテゴリー	データ
母性看護学講義開始から終了まで	看護の対象としてイメージできないために感じる学習への困難感	妊産婦等に接した経験がないからイメージが付かない	何か，妊婦さんの事例とか，いまいち身近に出産した人とかに接した経験がないていうのもあるんですか・・いまいち，こう，現実的に想像できなくて，なんか苦手なんです。
			妊婦さんとか褥婦さんへの看護ってどういうのがあるんだろうってのが，さっぱりイメージできなかった。
		女性の患者さんを受け持った経験がないからイメージが付かない	普通に男性患者さんを受け持ってきて，全く母性の領域とはちがう領域の患者さんを受け持ったので，やっぱり，母性ってどんな感じなんだろうって，イメージが全然漠然としてて，イメージができなくて。
		自分で体験できないからイメージできない	自分が男性だから，そのホルモンのバランスとか知識としては理解するけどイメージができない。，病気とかと違って自分には起こりえないことだからあんまりイメージがつかなくて。（中略）何ができるんだろうなって思って。 何か妊娠とかの話を聞いてても，あんまり自分には関係ないとは思うし，自分の身に起きる事とか，そういう感じじゃなかったので，苦労した。
			自分の身体でいまいち想像できないというか。何か苦手意識・・こう，淡々と事実を覚えていっている感じ。ホルモンの作用とかも，高校の生物じゃないですけど，淡々と覚えていって，いまいちイメージが描けてない感じ。
	学びづらく難しい学問領域と感じる	学問としての難しさを感じる	母性はもともと，家族看護学の時も，ちょっと難しいなって思ってて・・・２年生後半の看護疾病論Ⅳも母性の内容だったけど，それも何か難しくて。
		苦手な教科	なんか，もう苦手だなって思った瞬間から，こう・・何か，勉強も，なんか，覚えよう覚えようになっちゃって
		テスト前にちょっと頑張る教科	全く使わないってことはないだろうから，学んでおいて損はないだろうって感じではあったけど，そこまでまじめに取り組んでた感じではなかった。（中略）テスト勉強の時にちょっと頑張ったくらいであんまり勉強してなかった。
	興味がわかない	実感のなさから興味がわかない	何か最初は講義を受けてても，なかなか実感っていうか興味が沸いてこないっていう感じで，簡潔に言うと，本当に講義前は全く，興味がなかった。
母性看護学講義終了後から実習直前	将来の看護師としての自分に関係がない	将来の職場としても無縁の世界	行くまえはやっぱり全体の実習の中で母性って男子学生にとって無縁ていうか，無縁っていう訳じゃないけど，なんか職場としてもちょっと，遠いから，深く考えていない状態で実習に行った。
	実習での看護展開についての不安	女性の患者さんを受け持った経験がないことによる不安	初めて女性の患者さんだったので，上手く接することができるのだろうかっていうところが，まず，実習行く前から実習の始まりまでの不安として大きい部分で。
		妊婦・褥婦に対する看護の一般論がイメージできないことへの不安	（実習が始まるぞっていう時期）ちょっと，乗り切れるのかどうかっていう・・・・そういう不安がありました。妊婦さんとか褥婦さんへの看護ってどういうのがあるんだろうって，さっぱりイメージできなかった。
		良い看護が提供できるだろうかという不安	ん～何も覚えてないなっていう。実習に向けて行けるのかな～っていう不安。その大丈夫かなあ？っていう実習に向けての不安で，その特に母性実習だからどうのこうのっていうのはありませんでした。（中略）それで患者さんと関われるのかな・・・患者さんていうか，妊婦さんと関われるのかな・・・っていう風な気持ち。
			なんか，先輩からいろいろ聞いてて，なんか男子はすることがないって聞いてたんで，不安で。自分に何が出来るんだろうっていろいろ考えてました。妊婦さん達にとって，より良い看護が出来るかどうかっていう部分で。妊婦さんのために自分が何が出来るかってその時は分らなくて，不安だった。
		どのような対象を受け持つのか事前にわからないことへの不安	うまく定まらないまま実習に行ったっていうのが・・・ほかの実習では，病名とか，そういうのを事前にもらうじゃないですか。母性はそういうんじゃなくて向こうにいって（受け持ちが決まる）不安も一番大きかったですね。
	男性であることを理由に拒否されるのではないかという不安	自分が男性であるがゆえに受け持ち対象が嫌がるのではないかという不安	あと，ま～，患者さん・・受け持ちさんが男性がつくっていうのが嫌なんじゃないだろうかって・・ま，そういうのを考えたりもしました。

表2　母性看護学実習中に抱いた困難感

カテゴリー	サブカテゴリー	データ
対象が女性であることに対するやりづらさ	女性に触れることを意識してしまう	向こうはそんなに意識していなかったとは思うんですけど，ちょっと意識してしまって，ま，女性を触るっていうことに意識してしまったんですかね。
	女性と話すことが苦手，話しづらい	ずっと話し続けたりとか，そういうのが，むずかしいかなぁって思った。（中略）成人やら老人では男性の方を受け持って，車の話とかで，すごい話とかで盛り上がったりしたんですけど，あんまり女性にはそういうのってないのかなって思うんですけど。
性差を強く意識した対象の見方	性差を理由にした諦め	実習中の考えっていうか，自分の頭の中は，やっぱ，女性と男性みたいな。性を二つで分けてたっていうのがあって。男性だから何もできないんじゃないかなとかっていう考え方が先行してて。実習中もやっぱり最初はそうだったんですよ。男性だから，無理だなとかって思ってたりもしてた。
	自分が男子学生だからという理由で対象が嫌がるのではないかという消極的な気持ち	生理的な変化っていう部分で，男子学生だから，断られるんじゃないかっていう思いがあったんで，何もできないんじゃないかって思った。（中略）実習中も一人の男性，男として，女性の患者さんと接していた。
		女性からしたら，あんまり触れられてほしくないことなのかなって，見られたくないことなのかなって，いろいろ勝手に自分達で，自分で思ってしまう。触れていいのかなっていう風に思ってしまう。患者さんが嫌がったっていう根拠とか事実はなしに，自分で遠慮してしまうっていうか。
		やっぱり相手が，嫌がるんじゃなかろうかとか，いろいろ意識して考えたりして・・・・。（中略）やっぱり向こうがいいとか，だめだとか，それが一番・・・（大変だった）。
		看護師の方だったんで，あの，ま，結構そういうところに理解はあるんだろうとは思うんですけど，男性だからいやなんじゃないかとかって。気つかってんじゃないのかなって。自分で遠慮してみたりとかして。（中略）むしろ，その・・足浴とかで気を遣わせちゃったりとかするんじゃないかって考えたりもしました。
	対象に性差を意識化させないための行動の困難さ	（抵抗とかは）ぼくはないんですけど，患者さんが異性ってことで，こう，性差を感じないようにするには難しいかなっていうのがあった。（中略）（実際は関わりはそれほど出来なかったけど）そういうのってどうしたらそう感じさせないのかっていうのが難しくて。僕は抵抗がないけど，患者さんはどう思うのかなって。
男性であるがゆえの実習上の制約	入室のタイミングが合わない	受け持たせていただいて二日目くらいまで，旦那さんが付き添いでいたんですけど。授乳中とかに，間違えて入ってしまう時があったりとか。ちょっと関わりに行こうかなって思うときに，女子なら授乳中でも入っても大丈夫じゃないですか。けど，男子だからNGって言われたのもあって，ずっと病室の前で立って待ってたりとか，そういうところがちょっとなんか大変だった。
		入るときですかね。まあ授乳している時も結構あったんで，先に女の子に行ってもらったから，その場にはあわなかったですけど。で，ま，個室じゃなかったんで，受け持ちさんが。他の妊婦さんとかもおられるし。ちょっとやりにくかったです。
		その時（入浴中で訪室のタイミングが合わないとき）は・・・ま，「ちょっとしくったな」と思って。（中略）めっちゃ長いときで２時間とか，なんか，立ってる時とかあって，その時は，「何しようこの時間」みたいな・・・なんか，カーテンとかしてて，「今，大丈夫ですか」って聞いたら「あ，ごめん，いま，授乳中」とか。たまにシャワー浴びてるときとかもあったんですけど。で，それ待ってて・・・なんか，タイミングがわかんなくて。ホントに，行くたび行くたび授乳中で１日関われないこととかもたまにあって。そこはちょっと大変だったかな。
	実践できることが限られる	大変っていうよりは「何でタイミングが合わんっちゃろう」っていうか。で，他の女子学生はどんどん入っていろいろ聞き出して，情報とか，こう・・取ってきてるけど，自分は全然関われなくて，ちょっと焦るっていうか。
		実習中もその・・・見学とかあんまり入らせてもらえなかったりして少し待ち時間があるときとかは，こう・・・勉強にはなるけど，こう・・・もっと時間を上手く使えたらいいんじゃないのかなっていうのは思ってました。
		できることも他の女子学生よりは少ないし，出産もやっぱり立会いは男子学生はちょっと・・・て言う人もやっぱりたくさんいらっしゃって・・・。何かちょっと，できることが少ないかなあって，思いましたね。授乳室も一緒に行けないし。
対象への看護が導き出せないことによる実習の不全感	看護が導き出せないことに対する困難感	看護を，看護師として何をすればいいかっていうのが全く思いつかなくて。やっぱり，その場で，実習で同じ場所に来ている人に聞いたりとかもしたんですけど，今何が必要なんだろうみたいなの・・・っていうのが何も思いつかなくて。結局ほとんど何もしなかった感じですね。
	実習では何かしないといけないと思う焦りの気持ち	う～ん，体調がすごい悪い人だったらそのままちょっと静かに休憩させておくとかそういうのもあるかなあって思うんですけど，・・・・う～ん・・・そうですね，何か・・特にそういうのがない人だったり，やっぱり何かしなくちゃいけないのかなって思っちゃう。何かしないといけない・・かなぁ・・・ていう感じで・・・。そうですね，何かしないといけないって感じて。

注）データ内（　）は研究参加者の語りの意味を理解しやすいように，研究者が文言を補足した。

表3　母性看護学実習中の困難感に影響した要因

カテゴリー	サブカテゴリー	データ
看護の方向性がみえる	教員からの助言で必要な看護を考え始めた	あの，先生，実習担当の先生に，あの～，結構男性だからこそできることがあるからそれをちょっと考えてみたらっていうことを一言言われて。で，ちょっと考えてみようかなって，思い始めて。
	対象のためになりたいという気持ち	話をする中で（育児に対する）悩みを持たれていたんで，やっぱりいつになっても，悩みっていうのは，こう，消えないんだな～っていうところをまず思って。で，それから少しでも，受け持ちさんにとっても（中略）（自分が助言したことをもとに）あ～私は（育児に関して）こうやっていけばいいのかなとか・・・。
	対象の身体の変化をイメージでき，必要なアセスメント内容が想起される経験	（子宮は）出産直前だとこのくらい膨らんでるのが，今はどのくらい変化してるんだろうとか，何日目だからこのくらいかな？とか考えながら見てて。（乳房を見るとき等は）結構恥ずかしさというより，そういうことを考えながらみれたんで，比較的，気にせずにいけてたかなって思います。
	看護の方向性を導くことができた	女性も妊娠をして，児を育むために母体がこういう変化をしているんだってのは授業で知識を得てはいたので，だったら良い母乳をつくるために栄養を摂ってもらおうとか，夜泣きで寝れてないようなら，ちゃんと副交感神経を優位にして休んでもらおうとか。
対象から受け入れられているという安心感	対象から受け入れられているという確信	結構受け入れがすごい良かった方だったので，すごい助けられました。
	見学・実践時の対象からの受け入れの良さ	後半はいろいろできてたりしたから，（相手がいやがらなかったら）やっていけるんじゃないかなとも思います。そうですね・・・子宮底測ったりとか，いいよって言われたら，実施したりした。授乳の時の様子も見ていいよって言われたら，見に行けてました。
	対象からの反応の良さ	患者さんがいいよっていってくれたので，感じなかった
		相手の反応が，こう，いろいろ得られたっていうところは，自分でも何かできるんだなっていう事の証明っていうか，励みにもなった。すごいそういった部分ではよかったなって思ってて。（中略）受け持ちさんが許可してくれたのであれば，積極的に入らせてもらいたいなっていうか。そういった抵抗がやっぱりなくなった。
		まず，先生が，ちょっと「学生に触らせてもらってもいいですか？」って聞いたときに，「はい，いいですよ～」ってすぐにいってくれて。そこまでさせてくれてるのに学ばない訳にはいかないなと思ったのが大きいですよね。そこはしないといけないなって。
実践を通して感じた満足感	関われたという実感	（マッサージとか肩とか胸の循環をよくするっていう方向性が定まったら）ちょっとやることができたかな～みたいな感じで。一日の計画とか結構立てたりできて。ようやくなんかできるようになったっていう感じになりました。
		今までこう，自分が話したことで何かを引き出すっていうことがそれまで出来てなかったんですよ。ほとんど女子学生が話して，それを傍らで聞いてて。初めて自分の思いとかっていうのをちょっと伝えてみて関われた。
	男性でも出来ることがあるという気づき	先生からのアドバイスだったりとか（を通して），自分の気持ちを伝えてみた（自分が計画したことを実践した）ときに，ま，自分でも何かできることはあるんだなっていうところに気付けた。
	実習での実践と机上の知識とが合致した経験	結構自分の中でいいのかなこれ・・・っていうところもあったんですけど，やっぱり，実際関わらせてもらって，「これがあの時の，授業で学んだ事ね？」っていうのが。「あ～ほんとうだ！」っていう風に単純に学習としておもしろいってのもありましたし。
	実践・参加出来た経験	三週間の中で，一週間は，あの外来とか別の，その，マタニティ教室とかに参加したりして，マタニティヨガとか，体験したんですけど，そのときはやっぱり楽しいなって。
		産まれるところに一緒に立ち会えてほんとに感動しました。受け持ちが決まったんですけど，その人が授乳もはいっていいですよって言ってくださって，その，赤ちゃんがどんな風に飲んでるのかとか，ちゃんとラッチオンができてるかとか，そういったところをちゃんと観察することができたので，実習としては良かったのかなとは思います。
実習のしやすさ	女子とペアのおかげで訪室のタイミング調整ができる	生まれた後とか，授乳している時とかあるじゃないですか，伺ったときに。だからやっぱり二人で（女子とペアで）よかったなあと。一人やったらもっとやりにくかったかなと思って。（中略）（嫌な気持ちから積極的な思いになった理由は）一人じゃなかったってのが一番大きいんですけど。
	女子と情報を共有できる	ペアを組んで，一緒に受け持たせていただけたのは，自分としても心強かったし，授乳の場面とか，ちょっと見られないような場面も後で，（ペアの女子と）共有してくれたっていうところはすごい自分のためになった。
実習での感動体験	実習での感動体験で学習意欲向上	新生児室に行くことができて，産まれたばっかりの子が集まっていて，すごいなあっと思って。すごいちっちゃいのにすごい生きようとしてるんだなって。看護師としてここに来ることはないだろうなって思ったけど，自分が父親になったときとか将来のそういったことの為にちゃんと学習しようかなって，そのときは思いました
看護の概念に照らして自分が関わることの意味を対象の立場から捉えなおす学習経験	自分の関わりが対象にとって看護になるかどうかを考えた学習経験	成人実習のときに，一つ一つの関わりをもうちょっと大切にしてみて・・・って，みんなに先生が言っていたアドバイスを聞いて。患者さんにとって，看護になるかならないかって。自分の技術が，看護になって・・・患者さんの為になるならって思って。普通に抵抗にはならない。それが回復を促進するケアになれば（いい）。僕が，異性って事でそれが消耗に繋がってしまうと，・・・それはしない方がいいなっていう関わりだけど。

注）データ内（　）は研究参加者の語りの意味を理解しやすいように，研究者が文言を補足した。

らこのくらいかな？とか考えながら見てて。（乳房を見るとき等は）結構恥ずかしさというより，そういうことを考えながらみれたんで，比較的，気にせずにいけてたかなって思います。」と，＜対象の身体の変化をイメージでき，必要なアセスメント内容が想起される経験＞や，「*女性も妊娠をして，児を育むために母体がこういう変化をしているんだってのは授業で知識を得てはいたので，だったら良い母乳をつくるために栄養を摂ってもらおうとか，夜泣きで寝れてないようなら，ちゃんと副交感神経を優位にして休んでもらおうとか。*」と，＜看護の方向性を導くことができた＞と実感したりすることで，積極的な言動がみられ，【看護の方向性がみえる】というカテゴリーが生成された。

対象の受け入れの良さもまた，男子学生の心理状態に影響を及ぼしていた。男子学生は「対象から受け入れられるか」という不安を抱えながらも対象への援助を試みることや，スタッフの看護実践の見学を希望していた。その際に＜見学・実践時の対象からの受け入れの良さ＞を得て見学・実践ができていた。さらに，看護した際に＜対象からの反応の良さ＞を感じ取るなど，＜対象から受け入れられているという確信＞を得ることで男子学生は【対象から受け入れられているという安心感】を得ていた。

さらに，男子学生にとってはなにかしら＜実践・参加出来た経験＞があると，実習をしているという実感を得る傾向にあった。また，＜関われたという実感＞を得ると，＜男性でも出来ることがあるという気づき＞を獲得し，さらに＜実習での実践と机上の知識とが合致した経験＞，＜実践・参加出来た経験＞から【実践を通して感じた満足感】を得ていた。

実習形態のあり方も男子学生の困難感の減少に影響していた。男子学生にとって，＜女子とペアのおかげで訪室のタイミング調整ができる＞こと，また，＜女子と情報を共有できる＞ことは【実習のしやすさ】をもたらし，実習上での性差を意識する事に伴う困難感の変化に影響していた。

実習前は母性看護学の学習へ消極的姿勢を示していたが，実際の新生児に触れて，生命力のすごさなどを感じたことで＜実習での感動体験で学習意欲向上＞し，【実習での感動体験】をすることで積極的な学習姿勢へと変化していた。

また，母性看護学実習に至るまでの学習経験の中で＜自分の関わりが対象にとって看護になるかどうかを考えた学習経験＞や，＜拒否された意味を対象の立場から捉える学習経験＞などの【看護の概念に照らして自分が関わることの意味を対象の立場から捉えなおす学習経験】がある学生は，実習の際に性差を理由に見学や援助をすることを対象から拒否されたことを困難と捉えていなかった。

6. 男子学生が抱いた困難感の変化の様相と影響した要因

研究参加者個別に，困難感と影響した要因を整理し，時間の流れを横軸に，実習への思いを縦軸にとり，上向きを積極的姿勢，下向きを消極的姿勢とした変化の様相図を作成し，そこに影響した要因を加えて研究参加者すべてについて図式化した。その中からA氏について図1，また，A氏の語りを表4に示した。その後に，実習中の困難感がいつどのように生じたのかという視点で研究参加者の困難感の変化の様相と影響した要因の共通性と相異性を検討した結果，男子学生の抱いた実習に対する困難感の変化の様相は，「実習に対する困難感が積極的姿勢へと変化したグループ」「実習に対する困難感が継続したグループ」「講義中から消極的姿勢を示さなかったグループ」の3つに分類された。

各グループの困難感の変化の様相を記述するために，それぞれのグループに属した研究参加者を取り上げ，その語りの中から，困難感と思われる語り及び困難感に影響したものをキーワーズとして抽出し，その変化を以下に示す。また，困難感と思われる語りを〔　〕，困難感に影響したものを≪　≫で示し，男子学生の語りであるデータを「斜体」で表す。（　）は研究参加者の語りの意味を理解しやすいように，研究者が文言を補足した。

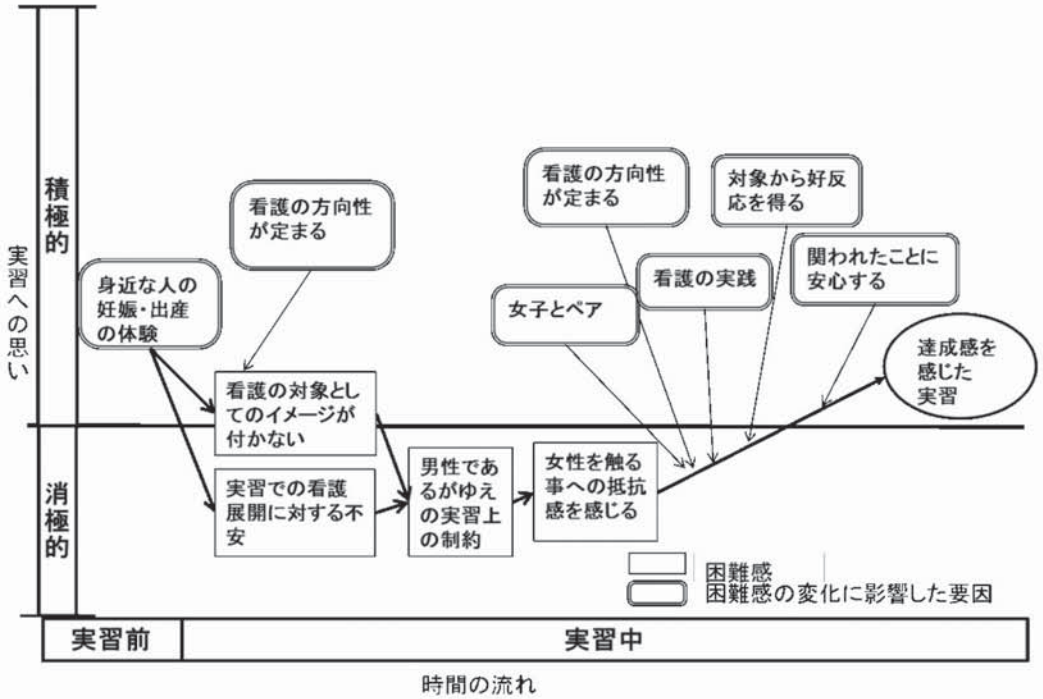

図1　A氏の困難感の変化の様相と影響した要因

表4　A氏の語りとキーワーズ

キーワーズ	データ
身近な人の妊娠・出産の体験	母親の出産の状況とかをすごい思い返して，みていたんですけど，やっぱこう・・・いろいろ，動いたら，すぐに息が上がっていた。生まれた後もすごい，きつそうな時が，やっぱり，眠れないっていうのもあった。
看護の方向性が定まる	母親は，そういうのかなあって思っていったんで，なるべく，こう・・・ お母さんにゆっくり休められる空間を作ってあげていきたいなあと思っていった。
看護の対象としてイメージが付かない	一番不安でした，いろんな実習より。 うまく定まらないまま実習に行ったっていうのが・・・ほかの実習では，病名とか，そういうのを事前にもらうじゃないですか。で，だいたい病名とか発達段階とかわかって，だいたい想像して実習に行くんですけど，母性はそういうんじゃなくて向こうに行って・・・不安も一番大きかったですね。
実習での看護展開に対する不安	先輩からの，卒業生からの話で，ま，３クールで自体，あんまり子どもが生まれないから，３クール後半になると。だから，受け持ち決まらないかもねという話も聞いていたんで・・・・。
男性であるが故の実習上の制約	入るときですかね。まあ授乳している時も結構あったんで，先に女の子に行ってもらったから，その場にはあわなかったですけど。で，ま，個室じゃなかったんで，受け持ちさんが。他の妊婦さんとかもおられるし。ちょっとやりにくかったです。
	ちょっとなかなか受け持ちが，あの，させてくれる，その・・妊婦さんがいなかった。
女性を触る事への抵抗感を感じる	足浴とか温罨法とかしようと思って行っても，まあ，向こうはそんなに気を意識していなかったとは思うんですけど，ちょっと意識してしまって，ま，女性を触るっていうことに意識してしまったんですかね。
女子とペア	やっぱり（女子と）二人でよかったなあと。一人やったらもっとやりにくかったかなと思って。
	母乳の分泌もやっぱ，促進できたらっていうことですかね。女子学生と話してですかね。
看護の方向性が定まる	女子学生とも先生ともあったんですけど，二人目のお子さんだったんですけど，その一人目のお子さんは混合で授乳・・母乳の出があんまりだったというのもあって，今回は母乳だけで育てたいってのがあったんで，ま，どうにか母乳の分泌が進まんかなってのがあったんで。
看護の実践	足浴して，次の日に，分泌がよくなりました・・。その，おっぱいが張ってきましたっていうのを言われて，その時はああ，してよかったなって思いましたけどね。
対象からの好反応を得る	結構受け入れがすごい良かった方だったので，すごい助けられました。 受け持ちさんがすごいしゃべってくれる人だったんで，その授乳とかじゃなくて，普通に話しているときにはすごい話しやすかったです。
関われたことに安心する	ま，すごい関わりにくいなって思ったけど，退院されたっていうのを聞いて，関われてよかったなって。
達成感を感じた実習	最後はよかったです。お母さんは無事退院されたっていうのを聞いて，よかったなあって思って。

なお，ここでは，研究参加者各個人の困難感の変化の様相を的確に表現するために，本人の語りを用いている。したがって，先に述べた質的帰納的方法により生成した「男子学生が抱いた困難感」と「困難感の変化に影響した要因」の表現とは必ずしも一致した表現とはなっていない。

1）実習に対する困難感が積極的姿勢へと変化した様相のグループ

このグループは急激に変化したタイプと徐々に変化したタイプがあった。

2つのタイプで表された，困難感が積極的姿勢へと変化した様相のグループは，講義中から母性看護学に対して〔看護の対象としてイメージが付かない〕，〔自分の身体で経験できないからイメージができない〕，〔将来の看護者としての自分には無縁な領域〕という困難感を抱いていた。中には講義中は，≪面白い母性看護学≫という意識で≪将来の自分と照合し学習意欲が向上≫していた者も見られたが，両者ともに実習開始直前になると〔実習での看護展開に対する不安〕を抱き，〔イメージが付かない母性看護学実習〕という困難感を抱いていた。実習中も，〔男性であるがゆえの実習上の制約〕や，〔性差を強く意識した対象理解〕という困難感が持続していた。

しかし，≪看護の方向性がみえる≫，≪対象から受け入れられているという安心感≫によって「*すごい有り難いなって思って。なんか勉強・・・学ばせてもらうっていう気持ちで触りました。*」，「*そこまでさせてくれてるのに学ばない訳にはいかないなと思った。*」と，≪学ばせていただくという姿勢≫になり，困難感は緩やかに積極的姿勢へと変化していた。さらに，≪教員から看護についての助言を受ける≫ことを経て，≪看護の実践≫をすることで達成感のある実習，深い学びをした実習を経験していた。

一方，実習が開始してからすぐに新生児の観察や分娩見学を通して≪感動体験≫をした者は，「*看護師としてここ（産科病棟）に来る・・・ことはないだろうなって思ったんですけど，その自分が父親になったときとかにはここにこうやって来るんだろうなって‥方が強くなって，将来のそういったことの為にちゃんと学習しようかな・・・*」と，急激に≪将来の自分と照合≫し学習意欲が向上し，さらに，≪看護の方向性がみえる≫と，「*全然暇な時間とかはなくて。ずっと（看護の提供方法を）考えてました。*」と，積極的姿勢を示し，さらに≪教員から看護についての助言を受ける≫ことを経て≪看護の実践≫を通して達成感のある実習，深い学びをした実習を経験していた。

これらの変化の様相に影響した要因を見ると，「実習に対する困難感が積極的姿勢へと変化したグループ」の中の急激な変化をしたタイプには，「感動体験」があった（図2）。また，徐々に変化したタイプには，「看護の方向性がみえる」ことと，「対象から受け入れられているという安心感」があることの両方があった（図3）。

以下に，急激に変化したタイプと徐々に変化したタイプについて述べる。

（1）急激に変化したタイプ

C氏は，母性看護学は〔将来の看護師としての自分には無縁な領域〕で，〔自分の身体で経験できないからイメージが付かない〕と考え，実習に対して〔イメージの付かない母性看護学実習〕として実習前は消極的姿勢を示していた。しかし，分娩見学と新生児の観察を通して≪感動体験≫をしたことで，一気に「*それからは，ずっと受け持ちのことを考えていた*」や「*自分が父親になったときとかにはここにこうやって来るんだろうなって（中略）将来のそういったことの為にちゃんと学習しようかな*」と，≪将来の自分と照合≫し，実習に対して積極的姿勢を示した。さらに，学習を重ねることで≪看護の方向性がみえる≫ようになり，≪教員から看護についての助言を受ける≫ことも加わり，≪看護の実践≫をすることで≪対象からの好反応を得る≫事ができたうえに≪知識と実習が結びつく体験≫ができたことで達成感のある実習を経験していた。

（2）徐々に変化したタイプ

G氏は，〔看護の対象としてイメージができない〕

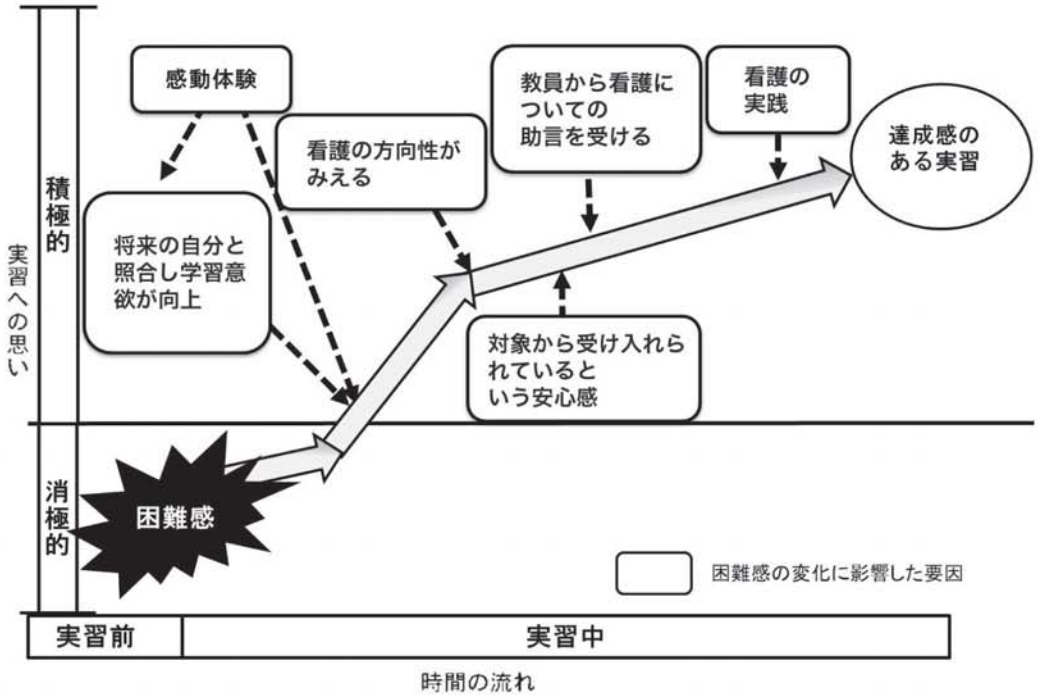

図2　実習への困難感が積極的姿勢へと急激に変化した様相

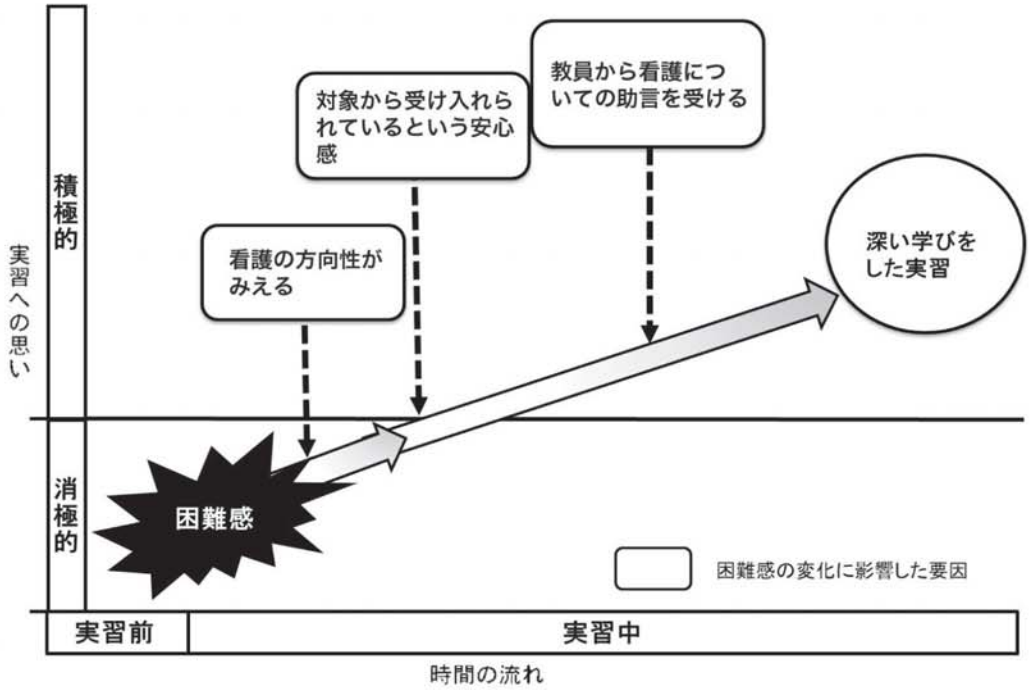

図3　実習に対する困難感が積極的姿勢へと徐々に変化した様相

がゆえに〔消極的な学習の姿勢〕を示し，事前学習で≪女性のからだについてイメージがつくことで興味がわく≫が，実習直前になると〔女性の患者さんを受け持った経験がないことによる不安〕を抱き，実習が開始すると〔性差を強く意識した対象の見方〕をしていた。しかし，「男性だからこそできることがある」という≪教員からの看護についての助言≫を受けたことをきっかけに≪看護の方向性がみえる≫ようになり，積極的姿勢へと変化していた。また，相談相手の獲得をして≪実習展開のしやすさ≫を得て，≪実践を通して感じた満足感≫と≪対象から受け入れられているという安心感≫を感じたことで，≪対象の役に立てたと感じる≫事に加え，≪看護の概念に照らして自分が関わることの意味を対象の立場から捉えなおす学習経験≫をしたことで，実習に対して深い学びをした実習という認識をもっていた。

2）実習に対する困難感が継続した様相のグループ

困難感が継続した様相のグループは，講義中から〔自分の身体で経験できないからイメージができない〕，〔学びづらく難しい学問領域と感じる〕，〔妊産婦等に接した経験がないからイメージが付かない〕ことで〔看護の対象としてイメージができない〕と〔消極的な学習姿勢〕を示していた。

実習直前から実習中において〔実習での看護展開に対する不安〕と〔性差を強く意識した対象の見方〕をしていた者は，≪対象からの受容≫を受けても〔対象への看護を導き出せない事による実習の不全感〕を抱いていた。

一方，上記の困難感を抱いていても自分なりの看護の方向性を立てて実習に臨み，≪看護の実践≫を通して〔看護を実践できることに楽しさを感じる〕が，≪計画した看護実践の機会が少ない≫ことを理由に〔男性であるがゆえの実習上の制約〕を感じた者は，急激に〔性差を強く意識した対象の見方〕が生じていた。

そして，両者ともに困難感の継続が見られ，実習が終了する間際でいくつかの影響する要因からの刺激を受け≪対象と関われるという安心感≫を得て積極的姿勢へと変化したが，達成感を自覚することができない実習となっていた。

D氏は，講義中から〔自分の身体で経験できないからイメージができない〕，〔妊産婦等に接した経験がないからイメージが付かない〕，〔学びづらく難しい学問領域と感じる〕ことで〔看護の対象としてイメージが出来ない〕という不安からくる学習への困難感と〔消極的な学習の姿勢〕を示していた。また，実習直前になると，〔実習での看護展開についての不安〕や〔男性であることを理由に対象に拒否されるのではないかという不安〕を抱き，実習が開始してからは，≪対象からの受容≫があるにもかかわらず〔対象が女性であることに対するやりづらさ〕と〔性差を強く意識した対象の見方〕をし，対象への看護が導きだせない事による実習の不全感を感じていた。実習が終了する間際で，≪教員から看護についての助言を受ける≫ことで≪看護の方向性がみえる≫ようになり≪対象と関われるという安心感≫を感じ，積極的姿勢へと変化を示したが，≪看護の実践≫を行う機会を得ても〔性差を強く意識した対象の見方〕は継続し，達成感を感じることのない実習となっていた。

3）講義中から消極的姿勢を示さなかったグループ

F氏は，〔覚えるのが難しい学問〕ではあるが，≪看護者としては学ぶべき学問≫として母性看護学を捉えていた。しかし，実習直前に抱いた〔イメージの付かない母性看護学実習〕にも，過去の実習において対象に受け持ちを断られた時の≪拒否された意味を対象の立場から捉える学習経験≫を想起して≪対象のための看護を意識≫し，積極的姿勢を示した。実習においては対象から看護の実践を断られるという〔男性であるがゆえの実習上の制約〕を感じたが，再度≪拒否された意味を対象の立場から捉える学習経験≫を想起し，≪教員から看護についての助言を受ける≫ことで≪援助できなくてもそれが対象にとっての看護であるという認識≫を持ち，消極的姿勢へと変化せずに積極的姿勢を維持し学びが深まった

実習を体験した。

講義中から消極的姿勢を示さなかったグループは，〔学問としての難しさを感じる〕，〔自分の身体で経験できないからイメージができない〕という反応を示しながらも，≪将来の自分に関係性を感じる≫し，≪看護者としては学ぶべき学問≫であると捉えていた。さらに，これまでの実習での≪拒否された意味を対象の立場から捉える学習経験≫を想起し，≪対象にとっての看護を意識≫するとともに≪対象から受け入れられているという安心感≫を得ることに加えて≪学ばせていただくという姿勢≫も付加され，対象との関わりを通して≪看護の方向性がみえる≫こと，≪教員から看護についての助言を受ける≫事を通して消極的姿勢を示すことなく達成感のある実習を経験していた。

Ⅳ．考察

男子学生には実習開始前から実習にかけて，性差を強く意識することでもたらされる困難感が存在した。この困難感は，実習中に積極的な姿勢に変化するもの，困難感が持続するもの，最初から困難感を示さないものという異なる様相を呈した。以下，この困難感の変化の様相について影響要因と合わせて考察する。

積極的姿勢へと変化した様相には，徐々に変化したものと，急激に変化したものがあったが，急激な変化をしたものには「感動体験」が関与していた。この「感動体験」は，苦手意識の軽減や学習への動機付け[8) 9)]などの効果があるとされ，苦手意識を持つ男性としての意識から「看護者を目指す者」としての意識へと変化させたと考える。また，これまで，「感動体験」から生じる好奇心や探求心は，新たな物事を受容する事で発想の転換をもたらす[9)]と指摘されている。本研究でも，学生が「感動体験」を得た事で前向きになれたのは，男性としての意識から看護者を目指す者としての意識へと発想の転換がもたらされたからとも考えられる。分娩見学の場合は命の誕生，新生児との触れ合いでは新しく産まれた命と，生命に関わることは感動を呼び起こし，性差を超えて看護者としての意識へと変化するとともに，性差を過剰に感じ苦手と感じた対象を「看護を必要とする人」と考え，急激に積極的な姿勢へと変化したと推察される。

また，この「感動体験」をした時期は実習開始直後であり，自分の性や対象の性を過剰に意識する前であったこと，そして，看護者を目指す者としての将来の自分と照合し，将来に役立つかもしれないという実習への動機付けとなったことが，積極的な実習姿勢へとつながったと考えられる。このことより，早期の「感動体験」は，困難感を感じる男子学生の指導において有効な指導方法の一つと思われる。

さらに，徐々に変化したタイプでは，「看護の方向性がみえる」と同時に，「対象から受け入れられているという安心感」が存在することで，困難感が「学ばせていただく」という姿勢へと変化していた。また方向性がみえた看護を実践していく上での教員の助言が，さらに実習への意欲につながり，これらにより困難感を感じなくなるという図式があった。

一方，実習に対する困難感が継続した様相のグループでは，「対象から受け入れられているという安心感」があっても，「看護の方向性がみえる」ことが体験できなかったケース，もしくは実習状況により両方を体験できなかったケースがあった。

このことから，「看護の方向性がみえる」ことと，「対象から受け入れられているという安心感」が併存することが重要な困難感の減少要因と推察された。先行研究ではこのことに言及したものはほとんどない。今後，これらを考慮した実習指導が望まれる。

困難感をほとんど感じなかったグループを見ると，母性看護学を看護者として学ぶべき学問としてとらえていることが特徴であった。これらから，「男性としての自分」に集中しがちな意識を，「看護者を目指す者」としての意識へと移行するような支援が重要と考えられた。

Ⅴ．本研究の意義と限界および今後の課題

大学4年次の4月にインタビューを実施したため，

研究参加者が母性看護学実習を体験してから最長で半年の時差が生じたことで，男子学生の想起に影響した可能性も否定できない。調査は１大学という限られたフィールドから得られたデータに基づいて分析を行っており，教育・実習方法が実習への男子学生の思いに影響している可能性を考慮しなければならない。なお，今回の研究では実習中の困難感の変化の様相と影響する要因を明らかにしたが，今後は，本研究で明らかとなった教育的示唆を実践に活かし，研究結果を検証する必要がある。

Ⅵ. 結論

男子学生の抱いた実習に対する困難感の変化の様相は，「積極的姿勢へと変化」「困難感が継続」「実習前から消極的姿勢を示さない」の3つに分類された。「積極的姿勢へと変化」する様相には，急激に変化を示すものと，徐々に変化を示す2つのタイプがあった。これらの変化には，「感動体験」や，対象の「看護の方向性がみえる」こと，「対象から受け入れられているという安心感を得る」ことが影響していた。また，積極的姿勢がみられたのは「看護者を目指す者としての意識を持った」時であった。

以上より，対象の「看護の方向性が見えること」，「対象から受け入れられているという安心感」が実習中の困難感の変化に影響する要因として重要であり，実習指導する上ではこれらを十分認識し，困難感を抱く男子学生への支援を行う必要性が示唆された。また，困難感を持つ男子学生に対しては，「男性としての自分」に集中しがちな意識を，「看護者を目指す者」としての意識へと移行するように支援することが重要と考えられた。

謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に心より感謝申しあげます。

なお，本論文は，宮崎県立看護大学大学院看護学研究科における修士論文の一部を加筆・修正したものであり，第48回日本看護学会－看護教育－学術集会（2017年8月：香川県）にて発表した。

利益相反

本研究における利益相反はない。

引用文献

1）村井俊介，高橋ゆかり（2005）：男子学生の母性看護学実習における困難－今後の母性実習のあり方を考える－，茨城県母性衛生学会誌，(25)，67-71

2）高橋順子,高野みち子，雑賀美智子（2010）：女子看護学生との比較からとらえる男子看護学生が感じている学習上の困難－看護専門学校三年課程の看護学生の記述内容分析から－，四国大学紀要，33，161-168

3）荒川直子（2008）：母性看護学実習において男子学生が経験する性差に関わる困難，第38回日本看護学会論文集(看護教育)，123-125

4）尾崎洋子，木川富枝，花田待子，他（2010）:母性看護学実習で男子学生が感じる困難，中国四国地区国立病院附属看護学校紀要，6，27-39

5）増田昌惠，天野順子，五影靖子，他（2007）：男子学生の母性看護学実習前後における意識調査－今後の実習のあり方の検討－，第37回日本看護学会論文集（看護教育），75-77

6）畠中佳織，峯 馨，林ひろみ（2007）：母性看護実習における男子学生の実習前・実習中・実習後の体験，千葉県立衛生短期大学紀要，26(1)，89-95

7）二川香里,松井弘美,長谷川ともみ（2015）：男子学生の視座から捉えた母性看護学実習における学習過程，母性衛生，55(4)，p.659-667

8）山口静江（2013）:母性看護学に対する苦手意識の形成要因と軽減要因，第43回日本看護学会論文集（母性看護），84-87

9）戸梶亜紀彦（2004）:「感動」体験の効果について－人が変化するメカニズム－，広島大学マネジメント研究，4，27-37

Research Report

Changes and Influencing Factors in Male Nursing Students' Sense of Difficulty in a Maternal Nursing Practicum

Rie Oono, Misako Nagatsuru

【Key words】 male students, maternal nursing practicum, sense of difficulty, aspects of changes, influencing factors

Rie Oono : Fiore KOGA Nursing School
(graduate with Master's Degree from Miyazaki Prefectural Nursing University)
Misako Nagatsuru : Miyazaki Prefectural Nursing University